

A classmate is a princess knight!

小説
「EKN」
吉沢メガネ

3

姫
騎士
クラスメイト!
が

試し読み版



Contents

第二章 俺と、魔貴族と、破天の骸

- *20話* 銀の仮面と、伝説の胎動 6
- *21話* 希望の赤玉と、双魔の共演 20
- *22話* 少女たちの語らいと、お漏らしと 34
- *23話* 宴の終わりと、最強の称号 50
- *24話* 目指すべき都と、俺の動揺 65
- *25話* 彼女の鎖と、彼女の欲望 77
- *26話* 管理者再びと、俺の愛録 97
- *間幕* 俺と、おっばいとおっばいと、おっばいと おっばいとおっばいとおっばい 115

第三章 俺と、女勇者と、復活の遺跡

- *1話* 夢界の出会いと、遺跡の都 133
- *2話* 水晶の獣と、戦乙女たち 149
- *3話* 羞恥の騎士たちと、邂逅 163
- *4話* 偽りの姿と、勇者の証 186
- *5話* 乳戯の魔薬と、二人の関係 201
- *6話* 都市の危機と、ふたつの依頼 221
- *7話* 妖狐の挑戦と、依頼の誤算 232
- *8話* リルナの威力と、急変の危機 251
- *9話* 密室の二人と、衝撃の光景 266
- *10話* クラスメイトたちと、蘇る機身 288
- *11話* 明かされる謎と、巨大なる変貌 302
- *12話* 嵐の前の宴と、攻略の手段 317
- *EX-Dシーン* フラミアのおくちと、ディアーネのお腹と 332
- *ボーナストラック* 俺と、キリカと、甘やかすキリカ 349

20話：銀の仮面と、伝説の胎動

あまりの衝撃に、誰もがとつさに動けなかった。

ナナの胸部を貫通した黒い刃は音もなく横薙ぎに振り抜かれ、巨大な右腕——破天の骸と一体化したその部位が肩口から丸ごと切り飛ばされる。

上半身をびったり半分断ち裂かれた魔法生物はバランスを崩し、鈍い激突音を立てて、えぐれた床に崩れ落ちた。

「クルス……ッ！」

凶行のすべてを一瞬のうちに終えた銀仮面の人物めがけ、敵意をにじませたフラミアの声。

その言葉に息を呑んだのは、俺とキリカ。

くる、す……だと？

「そんな、まさか……」

「まさかお前……！ 来栖アラヤ……なのか!?!」

※ ※ ※

「……ねえ、小田森くん」

横合いから遠慮がちにかけられたボソボソ声、俺を現実に戻した。

ここは学校のプールサイドで、俺は尻の痛がゆい体育座りポーズで水泳の授業を見学している真最中……同じく病み上がりのこいつ、来栖新耶と同じように。

「どうしたの、さつきからブーツとして」

まさか、さつき綺麗なフォームでプールに飛び込んだ姫野桐華ひめのきりかのカラダを、好き放題に調教する妄想をたくましくさせていた……などとは言えない。やべ、ちよつと勃起してる。

「ああ、いや……これって学校生活屈指のムダな時間だよな、って思ってたさ」

「あはは、確かにそうかもね。僕はもう慣れたけど」

男女含めてクラスで一番病弱な来栖は、体育見学の常連だ。

俺よりもやや小柄、線が細くなよつとしていて顔だけ見れば女の子のようでもある。

「それに、悪いことばかりでもないよ。ほら、こうやって小田森くと話す機会できたしさ」

「……はあ？」

俺は別に、こいつと友達とかではない……そもそも友達と呼べるような奴は一人もいない。

だが何かと理由をつけて体育をサボりがちな俺と、結果的にこうやって二人でいる時間が時々生まれ、その縁でどちらからともなく簡単な会話くらいはする関係になつていた。

「変なヤツって言われないか、お前。というか今の発言はちよつとキモいぞ」

「そうかなあ……？」

来栖がイジメに遭っている光景を、俺は何度か見たことがある。

気弱でおどおどしたいかにも突つきがいのある性格はもちろん、男子に人気の「鈴すずちゃん先生」と親戚関係だからというやつかみもたぶん理由だろう。

まあ、俺にはどうでもいいことだ。ヘタに関わって巻き込まれるのはアホのことだ……あの姫野桐華なら、イジメの事実を知ったら余計なおせっかいを焼くかもしれないが。

「まーいいや。そーいや来栖つてき、ゲームとかやるほう？」

「うーん、最近はスマホゲーばっかかな。それでゲームちゃんと遊べてるって断言するのも何かちよつと引つかかる気がして……」

「あゝ、なんとなくわかるわかる、それ。まあ、俺も似たようなもんなんだけど——」
じりじりと暑いプールサイドに並んでの、そんなとりとめもない、くだらない会話。

でも今思えばそれは、ぼっちの俺にとって当時の学校生活で唯一といつていいくらいの……友達未満の会話だったかもしれない。なかつた。

……そんな来栖がトラックに轢かれて死んだのは、あの修学旅行の二ヶ月前のこと。

その死を発覚したイジメと関連付けたがる連中もいたが、遺書とかそういうものが出て来たわけでもなく、来栖のいなくなつた後も俺たちの学校生活は特に大差なく続いていった（鈴ちゃん先生はずいぶんショックだつたようで、一週間ほど学校に来なかつたが）。

つまり俺たちは二ヶ月遅れて全員で来栖の後を追ひ、そして来栖だけがこつちの世界に転生できなかつたことになる……俺は少なくとも、そう思っていた。たつた今まで。

※ ※ ※

「あらためて久しぶりだね、小田森トオルくん。そして姫野桐華さん」

世間話でもするよな気楽さで、くぐもつた仮面の声が俺たちの名を呼ぶ。

かざした手から魔力らしき球状の力場が展開し、切断されたナナの腕を包んで浮き上がった。

「ほ、本当に来栖くんなの……!？」

「気をつける！ なぜこの世界にいるのかわからないが、少なくともこいつの作業だ。セレストアに

銃火器を与えてけしかけたのも、フラミアのことをイヴリースに伝えたのも、全部……ッ！」

今思えば、セレスタを派手に暴れさせたのは陽動に違いない。その隙にまんまと潜入したこいつは、フラミアに暴走の切っ掛けを与え、そして待っていたのだ……俺たちの消耗を、隙を。

くそッ、次々起こる事態の対処に追われて、根本的な違和感に気付けなかったなんて！

「まさかあの、妹君」の暴走を完全に止められるとは正直驚きだったよ。こつちとしては、この地下集落が消し飛んだ後に残った、破天の骸」を回収するルートも想定してたからね」

「狙いは、破天の骸」、そしてフラミアがお前のことを知っている……つまり、今のお前はイヴリースの手下ってことか」

「手下って表現は心外だけど、まあそういう理解で構わない。さすが、頭の回転が速いね」

その時、俺の目配せを受け、現状ほぼ唯一まともな戦闘力を残したシエラが動いた。

巨大な弓に今度は赤色に輝く光の矢が形成され、クルスめがけて電光石火に放たれる。

白いローブから伸びる細腕を、どすつと鈍い音を立てて矢がちょうど半分貫通した——が、銀仮面はまるで意に介した様子なく、うめき声ひとつ発しない。

「な……なんじゃあいつは、痛みを感じておらぬのか……!!」

「!! お兄さん、クルスのやつ逃げるつもりだよっ！」

ナナの腕を包む力場がクルス自身も取り込み、その姿が陽炎のようにゆらめく。

まさか瞬間転移の類いか……まずい、このままじゃ、破天の骸」がそっくり奪われる！

「やらせるかよッ！ いちかばちかだ、突っ込めキリカ！」

「!? これは……っ！」

叫ぶと共に俺の手で軽快な射撃音をあげたのはダークグレーのアサルトライフル、SG 550。

セレストが最後に使った銃器、唯一残弾の残っていたそれを回収して背中に吊るし、マントで隠して持って来ていたのだ。人間相手に銃なんか撃つとは思わなかったが、やるしかない。

時分割加速インターアクセルの腕輪で体感時間を加速し、可能な限り狙いをつけて放つ。

それでも慣れない反動で正確には飛ばず、骸の腕と銀仮面の間を偶然かすめるようにバラまかれた銃弾の雨は——だが結果的に物理的な弾幕によって、クルスの動きをほんのわずかに妨げた！

「っ、はああああッッ！」

すかさず、キリカが最後の魔力を振り絞って天翔輝円トウキウエンで舞う。

加速した煌剣の刀身が、一瞬だけ反応の遅れたクルスの仮面めがけ迫り——！

「……なにッ!？」

驚くべきことにクルスは、破天の骸と一体化したナナの巨腕そのものを盾にした。

そのおよそ半分、ヒジ近くから先にあたる部分がアルカンシエルによって斬り飛ばされ、転移の力場からはじき出されて宙に舞う。そしてクルスの左手がそれを掴もうと伸び——！

「させるか！ アメリア、ビュートブレイドをッ！」

わかつたぜ——と女戦士が伸ばした鞭状連結刃が、一步先に下腕を絡めとりみごと引き離した！

「やるね、トオルくん……君と魔隷たちの活躍に免じて、その片割れはしばらく預けておくよ」
悔しさと賛辞の入り交じったような、くぐもった声。

今度こそその体が急速に非実体化してゆく……クルスの手元に残った骸の上腕部と共に。

「魔隷……それが君の欲望で、君の強さか。だけど、こっちも自分の目的を譲る気はない。そのた

めに、破天の骸^カはどうしても必要だからね……そう遠くないうちに、また会おう」

「待てッ、クルス！ お前にはまだ聞きたいことが——！」

と、銀の仮面がその向きを変えた。おそらくその下にある視線の先は……システイナ姫。

「ああそうだ、トオルくんを助けてあげてくれ、予言の姫^カ。彼には君の予言の力が必要だ」

「え……？」

最後に姫の動揺と、かすかな発光とを残し、クルスは……銀仮面の転生者はその場から消えた。

と、息つく間もなく、ナナに走り寄って治癒処置を施そうとしていたニーナの悲鳴が上がる。

「ご、ご主人様あ！ ナナちゃんの魔力反応がどんどん低下していますっ！」

「なんだと!? おい、ナナ！ 返事をしろっ、ナナ！」

金縛りが解けたように次々とナナに駆け寄り、横たわった巨体を囲む俺たち。

あらゆる方に向けたモノアイに、切れかけの豆電球みたいな光がかすかに灯った。

「ゴ主人……」

「よかった、ああ、しゃべらなくていい。待ってる、すぐ直してやるからな」

「イヤ……聞イテクレ、ゴ主人……!! ナナハ……ナナハ、コノ体……ダ。皆ミタイニ、ゴ主人ヲ

……日ナ行為デ喜バセテアゲル事ハ、デキナイ」

「おい、おいナナ!! こんな時に何言ってる!!」

赤銅色の巨体を揺さぶるが、ナナは動かない。無事に残った左腕すらぴくりともしない。

「皆ガ、ウラヤマシカッタケド……デキナイカラ……ダカラセメテ、ニーナヤ他ノ皆ヲ、守レテ良

カッタ……フラミアヲ、助ケラレテ良カッタ」

「あ、あたしを……？」

おい、ちよつと待て。

これではまるで。まるで遺言みたいで。

「馬鹿言うな！ よしわかった、お前が直つたらセックスするぞ。なに、穴ぐらいどつかにムリヤリ開くだろ、お前がやりたいんならしてやる、頑張ったご褒美になんでもやってやる！」

「ホント……カ……？　ゴ主人ハ、優シイ……ナ……デモ、変ダ、眠クナツ……テ……」

「おい、おいナナツ!!　ふざけんな、おいツ!!　俺の命令が聞けないのか、眠るなツ!!」

「ゴ主人……ミンナ……楽シイ思イ出、ヲ……ア……リ、ガ……ト……、……」

地面に落ちる線香花火のように消えてゆくモノアイの残光、それを最後に。

アールマV7と呼ばれたアーマーゴーレムは……全機能を、停止した。

「な……ナナちやああああんツツツ!!」

※ ※ ※

ハイネキッスル
陽炎魔城、血と炎の色に染まる魔寶石で造られた城主の間。

人間界より戻ったクルスが、魔力球体の中に浮かぶイヴリースにうやうやしく包みを差し出す。

「これが——これこそが、破天の骸か」

大魔貴族の声に混じるかすかな高揚の色が、その物体の途方もない価値を物語っている。

「クルスよ、よくやった——して、これが、すべてであろうな？」

「は？　おっしゃる意味がよく……」

「とぼけるなよ」

下位魔族ならそれだけで血を噴いて気絶するほどの高圧的精神波を叩き付けられても、銀仮面の人物は動じない。

「むろんですとも。魔隷術師の手にあつた骸は残らず、奪つて参りました。これがすべてです」
しばしの沈黙の後、ようやく精神波の圧が緩やかなものに変わる。

「——よかろう。では、魔隷術師めはどうなった？」

「仲間たちと一緒にフラミア様の暴走に巻き込まれて生き埋めになったようですので、さすがにその後の搜索までは……まあ、死んだんじゃないでしょうかねえ」

「では、フラミア様は、どうなったのだ！」

焦燥を含んだ声は、クルスの背後から浴びせられた。獅子頭の魔貴族、けんまきやう劍魔卿シュトラール。

「おや、いらつしやつたんですか劍魔卿。ああ、あなたの十二魔劍のコピー、役に立ちましたよ」

「そんなことはどうでもいい！ 妹君はどうなったかと聞いて——」

『シュトラールよ、あれと我との魔紋による繋がりは断たれた。それがすべてだ』

「な!? なん……と……!!」

がくりと頭を垂れる歴戦の忠臣。

主君の冷酷な言葉が意味するところは、フラミアの死に他ならないと悟つたのだ。

そして、沈黙に支配された広間の中……イヴリースの浸かる高濃度魔力溶液が、不意にごぼりと音をたてた。それは長年仕えた劍魔卿も聞いたことがない、主君の精神が動揺する音。

『む……これは——!!』

※ ※ ※

誰もが長い間、言葉を発しなかった。

パルミューラも、システイナ姫も、フラミアまでが押し黙り、ニーナの号泣だけが響いた。もしやと思い残った右腕の下腕部を、人間の手に触れないように気をつけながらナナの体や傷跡に接触させてみたが、何の反応も起きなかった。

「小田森くん……」

「姫野さん、今の俺の顔はちよつと、見ないでいてくれるかな」

許さない。絶対に許しはしない。

ナナの命を俺たちから奪ったあいつが、あの元クラスメイト、来栖だろうと構うものか。地獄の果てまでも追いつめて、後悔させてやる……！！

「あ……………ディアーネ姉さま……………」

ポロボロになった部屋に褐色のダークエルフが静かに入って来たのは、その時だった。

盲目の巫女は迷いのない足取りでナナの残骸に歩み寄ると、頭部にそつと褐色の手をかざす。

「なるほど……やはり感じます。ごくわずかですが……眠りし魂の鼓動を」

「どういふことだ、ディアーネ!!」

ダークエルフは涼やかな美貌をこちらに向け、かすかに口元をほころばせた。

大丈夫です、と安心させるように。

「このアーマーゴレムどのは……まだ、生きているということですよ」

※ ※ ※

魔水晶の床が音もなく開き、その中に、破天の骸が吸い込まれて閉じる。

異変は、イヴリースが瞬時にその処置を終えた直後に起きた。

「な……何事かッ!？」

城主の間天井近くの空間そのものがベキベキと異音をたてて割れ、剣魔卿が驚愕に目を見開く。縦数mに及ぶ亀裂から現れたのは、だがそれに反して拍子抜けするほど小さい人間大の影。

「どうもどうもおお。お久しぶりねえ、イヴちゃん」

「……………」

大魔貴族に対し不遜極まる挨拶を飛ばした声の主——狐の耳と豊かな金髪を持つ女性魔族。

白と金の着物状装束の胸元から、豊かすぎる真っ白い双乳が今にもこぼれそうだ。

浮遊する巨大な勾玉形の足場に、ふさふさの尻尾を何本も生やしむつちりした尻で腰掛け、朱色のキセルを艶っぽい口元にくゆらせている。

「よ…… 妖狐天仙まよこてんせん、ミクラ……様!? 八冥家最古の当主がなぜここにッ!？」

「あらあ、ワタシだけじゃないのよお?」

ミクラが現れた空間の裂け目、その縁に巨大な三本爪が内側から右、左の順に二組かかったと思ふと——それらの真ん中からゆつくりと出現したのは、ドス黒い血の色の鱗に覆われ無数のねじくられた角を生やし、溶岩のごとく輝く三凶眼を持つドラゴンの頭部。

眼のひとつ分だけで、隣に浮かぶ狐耳大魔貴族の身長に匹敵する威容を誇る。

「ど、龍血魔公ドラゴツツノコ……ッ!？」

『ヴラドヴェリ……』

「なるほど、あれがもつとも三大公に近いという八冥家筆頭の……!」

最古参にして広大なる魔界仙境の支配者、魔力では三大公に引けを取らない、妖狐天仙。

竜種の圧倒的な力と吸血種の不死性を併せ持ち、筆頭の座に二千年君臨する、龍血魔公。

八冥家の三頭までが同じ場所に揃うという、千年近くぶりの異常事態。

出現した者たちは、一步も動けぬ剣魔卿やクルスに視線さえ向けない。

イヴリース配下の魔貴族ごときは家具同然、特に意識を払う対象ですらないのだ。

『お二方……断りもなく我が居城を侵すこの非礼、いかなる理由あつてのことか？』

〈愚問。戯れるな、若輩〉

龍公の発する短い言葉そのものが死の魔力を宿した呪言となつて、城主の間を荒れ狂う。

シュトラールの耳と口元から血が伝つた。直接叩き付けられていれば即死していただろう。

「まあまあ、ウラちゃんはちよつと黙つてねえ。理由も何もそんなの決まつてるじゃないのよお

……魔王サマの置き土産、貴女が集めようとしている、破天の骸のことよん」

『ほう。なぜ我からそのような話が聞けると？ あれは伝説に過ぎぬ存在では……？』

あくまで涼しげにシラを切る主君を前に、全身から脂汗を流すことしかできないシュトラール。

だがミクラは、その答えは予想済みとばかりにころころと、鈴を転がす声で笑う。

「だつてねえ、とうとう現れちゃつたんだもん、人間界に——」

くるりとキセルを回し、その筒先にイヴリースへと向ける、妖狐天仙。

「——勇者ちゃんが、ね」

※ ※ ※

あれから丸一日が過ぎ……半壊したダークエルフ地下集落は、急ピッチで再建が進んでいる。

俺は自室に一人座り、手におさまったピンポン玉大の赤い球体をランプの灯りにかざす。

ナナが残したモノアイ。

そしてこれこそが、ナナの魂の在り処なのだ。

『私が巫女としての力で、物に宿る意志を読み取ることができるのはご承知ですね。ナナさんの記憶、心、魂……そう呼べるものは確かにここに残っていますよ、トオルどの』

ディアーネの言葉が正しければ、ナナはまだ完全に死んではいけない。

ひとしきり喜びに沸いた後、俺たちの旅に新たな目的が加わった。

そう——ナナを、再生させる手段を探すことだ。

ナナはニーナたちのパーティが遺跡に眠っているところを発見したという。

そしてまるでバックアップ用でも言うかのように、コンバクトにまとめられた記憶中枢部。

ならその新たな体を造り出す、あるいは見つけ出すことさえできれば、ナナは蘇る。

そしてその手掛かりを得るためにも、システィナ姫に新たな予言夢を見てもらう必要がある。

ダークエルフの里にこれ以上滞在することに、イヴリース陣営の再襲撃を警戒する声もあったが、少なくともすぐにそれはないと俺は判断した。

俺にはひとつの確信があった。あのクルスの言葉……あいつとイヴリースとは一枚岩ではない。

おそらくは、互いが互いを利用する関係。そこにこそ付け入る隙があるはず。

だからこそ、骸の片割れをしばらく預けておくとクルスが言った以上、今は猶予の時間なのだ。

さて……それはともかく、だ。

「お兄さん、お兄さんっ！ 準備できたよー！」

ステータス

【魔隷術師トオル】……………（スキルレベルUP！）

ジョブ…魔隷術師LV16

スキル…隷属魔法LV10／

魔の契約LV1↓2／魔隷強化LV6

現在の魔隷（残り枠…2人分）

【姫騎士キリカ】【メイド法術師ニーナ】【女戦士アメリア】

【エルフの精霊弓士シエラ】【魔貴族バルミューラ】

【女伯爵ユーリナ】【狂公女フラミア】【異界機士セレストア】

「おい、フラミア！ お主、新参者なら少しは遠慮というものを…………！」

「えー、そんなの知らないもん。早い者勝ちいっつ、とお！」

扉が勢いよく開かれ、入って来たのはコンパクトサイズのロリボディふたつ。

さあ、いよいよ待ちに待った魔貴族3Pの時間だ！

ステータス

【精霊弓士シエラ】……………(特殊装備ゲット！)

ジョブ…精霊弓士LV9

スキル…弓技LV4／精霊魔法LV2／隠密行動LV3

特殊装備…星讀弓サウザンドライト

【狂公女フラミア】……………ジョブ…狂公女LV13(本来は少なくともLV20以上)

スキル…空間破砕LV11(本来は少なくともLV16以上)

魔法抵抗LV2

【異界機士セレストア】……………(ジョブチェンジ！)

ジョブ…剣士LV8↓異界機士LV4

スキル…剣技LV7／異界兵器LV0↓3

魔法抵抗LV1

※不正な手段によってスキルが変更されています

21話…希望の赤玉と、双魔の共演

「じゃあ、この中にあいつの意識が眠ってるんだ……」

灯りにかざした赤い宝玉を、琥珀色の瞳で覗き込むフラミア。

その表情には、いつもの無邪気なテンションとは違う神妙さが見え隠れする。それは、自分のために命をかけてくれた相手——これまでフラミアの周りにはいなかったであろう存在——に対する感謝と敬意の表れだった。

「……あいつ、あたしを助けようとしてくれたよ。自分がこんなになってまで……血が繋がってるわけでもないのにさ。お兄さんと一緒に、こんなあたしを……！」

最愛の姉、イヴリースという精神的偶像を失ったフラミアだが、ある意味長年の呪縛から解放されたような朗らかな様子で、思ったより安定している。もちろん、まだ姉のことに関して直接口に出そうとはしないが。

そして依存対象はどうも俺に変わったようで、あれからしよっちゅうベタバタとくつついてきている。まあ、悪い気はしない……キリカの視線は妙に痛かったが。

「このデクノポーは、そういうヤツじゃからの。わらわと最初にやりあった時もそうじゃった、自分より仲間の身を心配して無茶ばかりしおる」

いつもナナとケンカ友達のように接していたバルミュラも、どこか寂しそうだ。ディアーネがまだ希望があると太鼓判を押ししてくれた時、ニーナと並んで真っ先にホツとした様子を見せていた

ほどだ。

「でも、ちゃんと元に戻るんでしょ、お兄さん？」

「ああ……もちろんだ」

ディアーネの超感覚は、いわば『魂』といえる中枢部分の存命を保証してくれた。

ニーナの話では幸い、ナナを見つけた場所と同じ年代のものと同推測される遺跡は、世界の各所にあるらしい。アールマV7という型式番号のような名も、同型機や予備パーツの存在を示唆しているといえる……ならばきつと、これを別の体に移すなりすればナナは再び蘇るのだ。

「いや、きつとじゃない……必ず俺が見つけてみせる。あの時あいつと約束したんだ、ちゃんとセックスしてやるつてな。それを果たさないままなんて俺のプライドが許さない」

「まったく、独占欲の強いヤツじゃ……それで、企画したのがこの乱痴気騒ぎというわけか？ 確かに、あの姫に次の目的地を予知してもらうまではここで手持ちぶさたじゃが」

二人を部屋に呼んだことの意図を指し、ちよつと複雑そうな表情のバルミューラ。さっきの話を聞き、ある意味ナナに遠慮している節もあるのかもしれない。

だが俺は、あえて明るい口調で断言する。

「だつてナナは、湿っぽいのを好むようなヤツじゃないからな。いつまでも悲しんでるより、俺たちがいつもみたいに楽しくやることを望んでると思うぜ——この中で」

俺はもう一度、ナナのモノアイを部屋の灯りに透かすと、それをベッド横の棚に敷いた布の上にとっと置いた。

そう、見ていてくれナナ。心配しなくても、俺たちは楽しくやらせてもらう。

そしてこの楽しい輪の中に、お前をすぐに……連れ戻してやるからな。

※ ※ ※

「で、この格好というわけか。まったく、またしてもこのようなはしたないものを着せおつてからに……」

「え、他にも色んなの着てるの？ ずるーい、あたしも全部着るっ、着るーっ！」

「はいはい、また今度着せてやるよ」

「やったあーっ！」

ベッドの上にちよこんと立った少女魔貴族、二人の軽いロリボディを彩るのは、極小生地のお白マイクロビキニ下着。

細いヒモで繋がった3 cm程度の幅しか持たない三角布が、べたんこ胸の乳首部分とつるつる無毛の土手をかろうじて隠すだけ。後はW幼児体型が惜しげもなく目の前に晒されている。

陶器のように白い肌、細い手足。ぽっこりと柔らかそうな局面をなだらかに描くお腹、可愛いおへソ。だが並べてみると、腰からお尻にかけて結構むちつと肉付きがいい。パルミューラ、太ももまどほつそりしていて前側からでも尻の谷間が覗き見えるフラミアと、それぞれ個性がある。

「じゃあ今日はあ、あたしたち二人でお兄さんといっっぱいえっち、しちやいまあーす！」

「お、お主わざわざそのようなことを宣言するでない、恥ずかしいじゃろうが！」

「えっ、パルミューラはいっぱいしたくないの？ あたしはしたいけどお？」

「だ……誰もしたくないなどは、言っておらぬ。わ、わらわとてその……し、したいわい」

「純粹にあつたらかと言うフラミアに引きずられてか、パルミューラも照れつつ意外なほど素直

な調子で口にする。思えばこいつも、最近はずいぶんと積極的になってきたな。

「あはっ、だったらいーじゃん！ ねえねえ、じゃあまずキスしよおにーさんっ、キスうっ」

ベッドに腰掛けた俺の隣にトスンと並び、羽根をばたばたさせつつ顔を近づけてくる。ミルクと柑橘系の入り交じったような匂い。

「なんだ、この前は好きな相手とじゃないとキスはダメだつて嫌がったくせに積極的だな？」

「あの時はあの時だもん、今はお兄さんのこと好きだしっ……えいつ、ちゅーっ」

琥珀色の瞳をそつと閉じ、小さな唇がつんと突き出される。紫がかつたストレートロングを撫でながらそこに俺のを重ねると、嬉しそうに自分からついばむような動きをチュツチュツと熱心に繰り返してきた。舌を入れる動きにも、おっかなびっくりすぐに対応するフラミア。

「んっ……ちゅっ……ふぁ、あはあつ！ どうしよどうしよお兄さん、あたしすっごいキス好きかお」

「ああ、俺も楽しいぞ。……なんだバルミューラ、そんなむくれて」

「むう……わらわも、トオルとちゅーしたい……わぷっ、なっなんじゃ急につ!？」

フラミアと逆側に座ったバルミューラをぎゅっつと抱き寄せ、ごつごつしたツノの生えた長い銀髪を優しく撫でてやると、ビクつと驚かれた。

「いや、お前がそこまでストレートにデレるとはちよつと意外でさ」

「で、デレとらんし。こやつ先輩魔隷として妥当な扱いを要求しておるだけじゃ……もん」

「はいはい。ほら、こややつてお前にもたつぷりチューしてやるからな？」

「ふあっ、はあっ……んっう、ふぁ……!! つそうじゃ、よい、ぞお……っ、んっちゅう……!!」

こつちの魔貴族様はベッドにひざ立ちになって俺に身を預け、情熱的に小さな舌を自分から絡めてくる。同じようにそれをねぶって応えつつ、性感帯のツノをカリッと指でひっかいてやると、鼻にかかった甘い声が「んふう……」と漏れた。

「ずるい、バルミューラの方が長いことちゅーしてるっ！ あたしもつかいしたいよお」

「ぶあ……まったく欲張りめ、では来るがよい。二人で一緒にトオルと……の？」

「え、三人でいつべんにちゅーするの？ なにそれすごい……でもいいよ、バルミューラのこともう嫌いじゃなくなつたしねっ」

「あうっ……、お主はなぜそうも……わ、笑うでないトオルっ！」

にこつと天真爛漫に至近距離から微笑まれて、逆にしどろもどろに照れるバルミューラ。

そんな二人の小顔を抱き寄せて、ひとくちサイズの唇と舌をふたつまとめて堪能する俺。

「んっちゅ、ちゅば……れろっ、んっぶあ……あはっ！ これすごおい、あたまトトロ口お……っ」

「んむう、ちゅぶっ、んちゅううっ……っぶは、しかしまさかお主とこのようなことになるとはお……まったくトオルめはいつも予想を覆してくれおる……っぶあは、あんっ！」

ぷりんと露出したロリ尻肉、やや骨張った感触のフラミアと比較的ずっしり柔らかいバルミューラのそれらを片手ずつで掴んで揉みながら、二本の舌と淫らな口内粘膜ダンスを踊る。

二人の鼻にかかった甘い息が顔を撫でていくのも、こそばゆくはあるが気持ちいい……と、唇を離れたバルミューラの顔が、次第に首筋を伝ってもつと下に移動していった。

「くふふ……よいか、ひとつ教えておいてやろう。トオルはの、ここを舌でねぶられるのが好きなのじゃ。こうやって……れろっ」

「くお、お前つ、いきなり乳首を……くっつ！」

にやつと上目遣いの赤い瞳が笑い、左胸にちっちゃな舌がべとつと張り付くと、ナメクジのように銀色の舐めあとを引いてイヤらしく這い回り始めた。

思わず声を漏らした俺の反応に、すぐさまフラミアも琥珀色の目を輝かせて興味を示す。

「へえ、お兄さん乳首弱いんだ？　なんだか女の子みたいだねっ！　じゃああたしはこっちゅつ、ふたりいっぺんにナメナメしたげるね……んっちゅ、れろっれりよろろっ……こうかなあ？」

「好きなのは否定しないが女の子呼ばわりは余計だ……うっ、うっく!？」

クッションが積み重なるベッドに上体をやや起こして寝転んだ全裸の俺、その左側にバルミューラが、右側にフラミアが寄り添い、ふたつの桃色ロリ舌が胸板の突起を楽しげにいばむ。

舌の広い部分を押しつけるようにして丁寧になメ回すバルミューラ、尖らせた舌先でピンとはじくように強くいじってくるフラミア。両乳首を別々に襲う刺激がビリビリしびれる快感電流になつて体幹から脳に駆け上り、また股間めがけてぞわぞわと背筋を下りていった。

「あはっ、お兄さんのおチンポさん、もうピンツピンにおつきくポッキしちやつてるよお？　触ってもないのにすっごおい、やらしいんだあ〜！」

「くふふつ、まったくじゃなあ、なんとも物欲しげにビクビク脈打たせおつてからに……先端からよだれがたぁんと垂れておるぞ？」

二人の言う通り、マイクロビキニロリ魔族コンビとのイヤらしいじゃれ合いによつてがちがちにいきり勃つた俺のものは、まさに天を突き勢いだ。

欲情でうっすら潤んだ四つの大きな瞳が、テカテカの亀頭に映り込むほどに凝視している。

「どうしてほしいのじゃ、んん？ しこしこか？ わらわがちんぼシコつてやろうかえ？」

左耳をくすぐり囁く、珍しくこつちをリードするように落ち着いた……だがその内側に熱く濡れた興奮をこめた声。

「それともお、ペロペロお〜？ あたしにい〜つばい、おしやぶりされちゃいたいかなあ？」

右の耳たぶをれるれる舐めながら、無邪気に鈴を転がすような……しかし妖艶なメスの色にじませたやや高い声。

「シコシコがいいのか？ 手コキでしこしこかあ？」

「ペロペロがいいのお？ おクチでおしやぶりの？」

ステレオで両耳から飛び込んでくる高音の囁きロリ声が、脳をビシビシと溶かし、侵す。

こんなもんガマンのしようがない、できるはずもない。

「くッ、そんなのどつちもやるに決まってるだろ、発情ロリ魔族どもっ……！ まずはW手コキだ、この体勢のまま二人でチンポ挿んで仲良くシコつてくれ」

「ほほう、つまり乳首舐めは継続という注文じゃな。くふふ、よつぼど気に入ったかこれが？ よいぞよいぞ、だらしなくふやけるまでしゃぶり抜いてやるわい、んちゅううう……っ！」

「いいよお〜、でも後でおチンポもたくさん舐めさせてね？ んじゃパルミューラそつち側からね、あたしはこつちから挿んでえ……あは、熱うっ♪ はあい、しこしこ開始い〜♪」

グロく赤黒い肉の柱に、両側から真っ白なちいちゃいおててがベタツと張り付いたかと思うと、しゅこしゅこニユコニユコと大胆な手コキ運動を開始した。

左側のパルミューラが、先端から漏れるカウパーを柔らかい手のひらにぬりぬりして滑りをよく



し、より大きなストロークでシコリだすと、右側のフラミアも見よう見まねでそれに倣う。

「かったあい、あつつうい……それにやつぱおつきいよお……！ お兄さんのこれが、あたしのお腹に入ってたって思うと、不思議な気分するね？」

「それがな、慣れるとお腹どころじゃないぞ。こいつなんか尻にずっぱり……」

「お、おいやめんかトオルっ！」

「え？ え？ むゝ、よくわかんないけど後でちゃんとショーサイ聞かせてねっ！」

きやあきやあ黄色い声をあげながら、フル勃起チンポを築しそうに両サイドから挟みコき、もちろん乳首も上目遣いで熱心にねろねろ舐め続けてくるロリ魔貴族二人。

宿敵同士だったはずが、まるで昔からの友人か家族のような丸まりようだ……変われば変わるもの、というより心根では互いを評価し、憎からず思う部分があったのかもしれない。

「えいえいっ、しこしこおっ……んっ、ふぁ！ そろそろおチンポさんもナメナメしたいよお、お兄さあ〜ん？」

「こらえ性のないヤツだな。いいぜ、俺もそろそろ頃合いだ、たっぷりしゃぶりつけ」

「わあい！ んふっ、それじゃあ先っぽいっただっきまあ〜っす！ ……ばくっ！」

「ぬ、一番味の濃い箇所をものにしおつて……まあよい、ではわらわはここじゃ……んちゅうっ」
あ〜んと八重歯のぞく大口を開けて、薄めの柔唇がにゅっぷり亀頭にかぶさり、よだれを大量にこぼしながらナメ回す魔性のロリピッチフェラが始まった。

パルミューラも負けじと、コテンつと横に頭を倒してハーモニカを鳴らすように血管ビキビキの肉幹めがけ吸い付き、ジュルジュルにゆるにゆると唇でシゴく。

「んちゅ、ちゅぶんっ……ねえねえパルミューラ、せっかくだし勝負しようよ？ お兄さんをいっばいキモチよおおくさせてたくさんどびどびゆさせた方が勝ちってことで、どうかな？」

「ふん、魔隷になって一朝一夕のお主がわらわに性技で勝てるんでも？ よい機会じゃ、格の違いというやつを思い知らせてやるわい。その勝負乗った……じゅぶつ、れろ、んりゅぶぶつ！」

「おいおい、人のチンポの上で了解も得ずに勝手なことを言ってくるなあ……うおうっ!？」

問答無用とばかりに、ライバル魔貴族コンビの舌技、口技が一気に激しくなった。

垂れ落ちる髪をしどけない仕草で耳の後ろに戻しつつ、かぼかぼ、ぶぼぶぼと下品なほどの音を鳴らしてチンポの上半分を派手にピストン搾りするフラミアのロリ唇マ○コ。

パルミューラもよだれまみれの舌をだらしなく口の外にあふれさせながら、ウラスジを甘噛みしたりフラミアの担当部分からのぞいたカリ首の段差を舌先で強めにほじくったりといった、手慣れたテクで俺の弱い部分を的確にねぶり攻めてくる。

「くふふっ、お主の弱点はよく把握しとるからのお……ほらほら、裏側のぶくつと膨らんだココを舌で強く押すようにシゴかれるのがよいのである？ ……んりゅっ、れろりゅ、れろお！」

「えっ、なにソレずっるーい！ いいもん、あたしだってお兄さんがどこがイイかくらい反応見えてわかるもんっ、先っぽ割れ目のことかあ……ちゅぶつ、ちゅぶるんっ……あはっ、やつぱり♪」

好敵手との勝負というシチュエーションで普段の羞恥心を捨てたパルミューラが、これまでの経験を活かして妖艶なまでのエロ舌使いを見せるかと思えば、フラミアは持ち前のバトルセンスを応用した天性のセックス勲で次々と俺の弱点を開拓していく。

しかも、快樂の絨毯爆撃はまだ終わらない。だしぬけに再び胸板をさわさわと別の快感が襲い、

思わず鼻にかかった吐息を漏らしてしまう。

「つぶあ!? え、ぐんぐんっておチンポさんまたおつきくなつた……つてバルミューラ、手え伸ばしてお兄さんの乳首手で触ってんじゃん!! ひきようだー!」

「くふふんつ、何を言う。トオルのチンポしか攻めてはならぬというルールはないぞ、文句があるならお主も同様にすればよいではないか……うりうり、ほれほれこのようにっ!」

「あ、それもそっか。じゃあ、こっち側もつまんでぐりぐり……あはっ、さつきより硬くなつた! お兄さんの、男の人のカラダって敏感で面白いねえ……もつとしたげるね?」

精いっぱい伸ばしたふたつの手で乳首をコネられながら、魔貴族様たちの幼いペロ肉と口唇をチンポに捧げて熱烈奉仕されるこの王様の快感、まさにロリ魔族ハーレム3Pの醍醐味。

互いのキラキラした唾液が俺の先走り汁と混ざり合い、イヤらしい匂いを放つ混合ローションとなつてチンポの表面すべてを覆つては、舌や唇、指の滑りがなお加速する快感無限連鎖だ。

「ちゅばつ、ちゅぶるう……! や、やるではないかフラミア、だが負けてはおれんつ……ほれ、ここもよいのであろうトオル? タマ袋を揉み揉みじゃ、ほおくれ、ほおれ……っ!」

「へえ、こんなとこまでキモチいいんだお兄さん? じゃあこっち側もうらいつ! かぶつてしておクチの中で舐めちゃうね、んつかぶ……にゅろんつ、にゅころろんつ……れろろろおっ!!」

「うおッ……そんなとこまで熱心につ、ううううっ!!」

急所中の急所、敏感な玉をくにくに優しくマッサージされ、あるいは可愛い口に丸ごと含まれてころころしゃぶり転がされるのは、弱点を襲われる恐怖と紙一重の激しい快感刺激だ。

腰がじくじくと熱を持ち、弄ばれる袋の中でどんだん精液が増産されるイメージが、複合的な攻

めにみるみる昂る俺の脳内でミチミチと膨らんでゆく。

「んぶ……ちゆぶ、にゆちゆるるっ……ふぁ。さあトオルよたつぷりと、この左タマの中でこつてり精液を作るのじゃぞお……わらわが勝負に勝ったという証、言い訳しようもないほど大量の生搾りぎあめんを、どびゅどびゅと恥ずかしげもなく放つがよい……っ！」

「ちゆぶぶっ、にゆるろろつちゆるろろっ……ちゆつぽ、つぶぁ！ ええ、ダメだよお兄さん、勝つのはあたしなんだからね？ 右のこつち側でぎゅんぎゅん作った白おいくつさあいネバネバみるく、バルミューラのよりたあくさん、どぶどぶううって発射しちゃって……ね？」

そんな器用なことができるかと言いたいが、気持ちよすぎてもう反論する余裕もない。俺にあるのは、間もなく訪れる発射の瞬間を盛大に、そして欲望のままに迎えたいという純粹な欲求だけだ。

その衝動に従い……がしつとふたつの頭、銀髪と紫がかつた青髪にそれぞれ手をかける！

「えっ、どしたのお兄さんっ……みゆうあっ!! あ、熱う!!」

「な、なんじゃっ……うにゆつつ!! こ、これはぁ……っ！」

小動物っぽい声をあげて驚く二人のロリ魔貴族。

ふにととしたほった同士の声をきくほどに寄せて、その真ん中にギン勃ち凶悪チンポをサンドしてやったのだ。巨乳組のパイズリにも劣らぬ柔らかな感触、そして汚けがれなくも高貴な幼い顔をまともて犯しているという背徳の征服感が、バリバリと脳内で火花をあげる。

「うそおつ、お顔でずりずりっ……あはぁ、これすつごいエッチいよおお……っ！ 顔のこつち側あ、ぜんぶお兄さんのニオイとにゆるにゆるでいつばぁい……っ！」

「くふっ、八冥家イカドクノミヤクラスの魔貴族二人の面体を、人間ごときの肉棒でこすりつけ犯すなどはっ……

…無礼にもほどがある破廉恥な蹂躪行為じゃぞ、トオルっ……！」

とろんと目をハートにする勢いで顔ズリにすぐ適応するフラミア、口では不満を言いつつも一種の精神的M快楽にうっとりした声音のパルミューラ。

俺は荒い息を吐きながら、両サイドから掴んだ二人の顔にググッと力をこめ、ごしゅごしゅヌチュヌチュと互い違いに動かして、射精寸前肉棒のズリ道具にする下品な行為に没頭するのみだ。

「おおっ……び、ビクビクと血管がつ、そのさらに奥の管が脈打つのが伝わってきおるっ……イクのかトオルよ、発射するのじゃな？ お主のチンポから、わらわたちの肉奉仕で溜まりに溜まった白濁液をっ……ぶ、ぶちまけるのじゃなあっ?！」

「ほんとだあっ、わかるよ、お兄さんがもう限界なの……っ！ いいよっイッて♪ やらし〜いネバネバみるく、たつぷりプリプリあたしとパルミューラにまき散らしてえっ、びゆるびゆるうっつて出してっ、出して♪ ほらほら出して出してだあ〜し〜てえ〜っっ♪」

はッはッと熱い息が淫語と共に両サイドから吐きかけられ、今にも爆発しそうな亀頭をくすぐり撫でる。俺の射精を今か今かと、目にハートを浮かべて待ち構える幼魔コンビ。

可愛らしさと淫猥さの同居したその光景に、耐えられる男なんているわけない。やわっこい感触のロリほっぺふたつに挟まれた尿道の中を、みゆちみゆちと白いマグマがせり上がってきた。

「おら顔寄せろっ、発情ロリ魔族どもッ……並んだ可愛い顔を俺のザーメン漬けにしてやる、くううっっ!!」

どぶびゆるるるううっつ、びゅくんっびゅくんっ!!

どくんっつ、どぶっどぶふんっつ!! べちやちやつにゆちやああ……っつ!!

「ぎやうつ、あつはっ♪ 来た来たあつ、あつついはいっぱあいつ、ほつべの横ドクドクつて通つていつてるううつ!! なにこれつ、すつごおおお……いつ!」

「んっつぶあ!! ふああつ、んくううつ……! おうおう、出るわ出るわ……つ、びしゃびしゃ降り掛かつてきおるつ、んつぶああつ!!」

きやつきやとはしゃぐ顔をぐしぐしとオナホみたいに動かして、盛大に射精中の肉棒ポンプを勢いよくしごきあげ、後から後からドロドロザーメンを吐き出し続ける快感といつたらない。

勢いよく噴き上がった粘液の塊が、重力に引かれて二人の発情顔に、二色の華やかな長髪に、そしてマイクロピキニに彩られたべたんこボディに、どぶどぶべちやべちやと我が物顔に降り掛かつては、好き放題に俺の匂いをデコレーションしていく。

「ああんっ、ぷあつはあつ……! 顔中がお兄さんの濃ゆいニオイでいっぱい、だあ……つ! でもでも、これって勝負はどうなったのお?」

「む、それもそうじゃな。まあ、こうもたつぷりとひり出しおったのは、わらわの性技がたまらなかつたからに違いあるまいがお……んふっ、髪までネトネトじゃぞ、しようのないヤツめ」

「えーっ、そんなのナットクできな〜い! 絶対あたしの方がいっぱい出させたもんっ、ねっねっ、そうだよねお兄さんっ?」

射精直後の虚脱状態でそんな無体なことを言われても困る……。

ロリ魔貴族たちの不毛な言い争いはそのうち、チンポの中に残ったあまりザーメンを吸い取り合う争いに発展するまで続いた――。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>